

英語の未来表現の指導方法に関する一考察*

——will と be going to の指導方法を中心に——

増 富 和 浩

1. はじめに
2. 学習指導要領における「英語の未来表現」の位置づけ
3. 時制の概念と未来表現の分析方法
4. 未来表現の指導方法について
 - 4.1. will 文について
 - 4.2. be going to 文について
5. まとめ

1. はじめに

平成 29 年度中学校学習指導要領解説（外国語編）では、指導すべき動詞の時制及び相に関する項目として、現在形や過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形、現在完了進行形、助動詞などを用いた未来表現が示されている。従来指摘されてきた点であるが、動詞の屈折語尾のみが時制を表すと仮定すれば、英語には動詞の「未来形」および「未来時制」は存在しないことになる。(1a, b) が示すように、現在形と過去形には動詞の語幹に -s と -ed という屈折接辞が付加されているが、(1c) には助動詞 will と原形の動詞が用いられている。英語に見られるこれらの特徴に基づいて、上記の学習指導要領解説においても現在形や過去形など他の時制とは区別して「助動詞を用いた未来表現」という表記が使用されていると考えられる。

- (1) a. The parcel arrive-s tomorrow. ¹ (Leech (1971: 51))
 b. The parcel arrive-d yesterday.
 c. The parcel will arrive__ tomorrow. (Leech (1971: 51))

未来に言及する表現に関しては、中学校および高等学校の学習指導要領解説では (2) に示すような will や be going to 等を用いた表現が、高校生（以上の読者）を対象とした学習参考書などでは、現在形 (cf. (1a)) や未来進行形を用いた未来表現も取り上げられている。

- (2) a. It will be fine tomorrow.
- b. I will take that yellow shirt.
- c. We are going to play basketball after school.
- d. Beth is coming to the party tomorrow.

(中学校学習指導要領解説 外国語編 平成 29 年 7 月より)

学習指導要領解説では上記に加えて、これらの表現の否定文、疑問文の形式についても指導するよう記されている。これら様々な表現をコミュニケーションの場面で有効に使い分けるためには、それぞれの表現の用法を区別して指導することが求められるが、仮に教育現場での指導が和訳に使用する表現(訳語)の違いを中心に行われているとすると、未来を表す個々の英語表現の正確な理解には繋がらず実際のコミュニケーションの場面に応用するのはかなり困難であると考えられる。²

本稿では、言語研究の知見を現場での指導に取り入れ、英語の未来表現の意味と用法を効率的に理解するためにはどのような指導法が考えられるかという問題について考察する。

2. 学習指導要領における「英語の未来表現」の位置づけ

高等学校学習指導要領(平成 21 年 3 月)では、文法事項の指導に当たっては以下の記述がある(p. 92)。(3a, b) はその一部を引用したものである。³

(3)「英語に関する各科目に共通する内容等」

- a. 文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。
- b. コミュニケーションを行うために必要となる語句や文構造、文法事項などの取扱いについては、用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用できるよう指導すること。

また、中学校学習指導要領では、文法指導の位置づけとしては、文法についてはコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導することとされている。また、文法事項のより具体的な取り扱いについては、限られた学習時間を有効に活用するため、文法用語の解説や用法の区別などに深入りしないよう留意するとともに、実際に活用できるようにすることが重要であると記されている。

中学校学習指導要領解説における時制に関する項目を見ると、現在形、過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形、現在完了進行形および助動詞などを用いた未来表現およびこれらの否定文や疑問文の場合を含むと記されている。⁴本稿では、これらの時制に関する事項のうち「助動詞などを用いた未来表現」について議論する。

このような状況と関連して、中学生用の学習参考書・問題集では未来表現のうち will と be going

to について以下のような学習項目が示されている。

(4) a. will : 「～だろう (単純未来)」、 「～するつもりだ (意思未来)」

It will be sunny tomorrow.

Will you go to the library? — Yes, I will. / No, I won't.

We won't be busy next week.

b. be going to ~ : 「～する予定だ、(予定として) ~するつもりだ」

He's going to see the movie.

Are you going to visit Australia? — Yes, I am. / No, I'm not.

They aren't going to go to school today.

上記の例に示されるように、中学生の指導においては、肯定文、疑問文、否定文の文例が示され形式面については具体的であるが、意味や用法の違いについては「～だろう (単純未来)」、 「～するつもりだ (意思未来)」 および 「～する予定だ、(予定として) ~するつもりだ」 など典型的な訳例を示すに止まっているようである。この点は、上記の学習指導要領における方針を踏まえて、意味や用法の違いには言及していないように思われる。この傾向は公立高校の入試問題を見ても確認できる。次の例は、ある県で過去に出題された公立高校の入試問題の一例であるが、出題意図は be going to を含む疑問文の形式・語順の理解度を確認する点にあるようである。

(5) 【問題文】 次の文の () 内の語 (句) を並べかえて、記号で書きなさい。

(ア you イ are ウ what エ going) to do tomorrow?

しかしながら、柏野 (1999) が、(6) や (7) を例に挙げて指摘するように、will と be going to の意味・用法の違いについてもさらに注目しなければ、具体的なコミュニケーションの場面での効果的な使い分けは難しいと考えられる。以下はいわゆる「意志未来」の例であるが、be going to は「前もってなされた決心」、will は「その場でなされた決心」を示す (cf. (6a, b)) ので、(7) のような場面では will を用いるのが自然で、be going to を用いると「電話がかかってくることをあらかじめ知っていた」という不自然な解釈になる (Swan (1995) なども参照のこと)。

(6) a. A: "Ann is in hospital."

B: "Yes, I know. I'm going to visit her this evening."

b. A: "Ann is in hospital."

B: "Oh, really? I didn't know. I'll go and visit her."

(Murphy (2012))⁵

(7) The phone rang. Ellen said, "I'll get it," but Brody stood up.

(P. Benchley, *Jaws*)

このような点を考えると、学習指導要領の方針とは別に、will や be going to の用法の違いや区別についても少し踏み込んだ指導が必要であり、そうでなければ、単に未来表現としての will と be going to の存在を知り、肯定文、疑問文、否定の形式を機械的に利用することができること以外に学習効果はなく、「コミュニケーションで活用できる」という学習指導要領が本来目指している結果に達することは難しいように思われる。本稿では、この点に注目し、英語の未来表現の指導において、必要以上に学生に負荷をかけずに必要な文法事項を指導するにはどのような方法が可能かという点を検討したい。紙面の都合上、次節以降では will と be going to の指導方法を中心に議論することにする。

3. 時制の概念と未来表現の分析方法

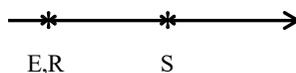
本稿では、大橋（2017）、金子（2002）、和田（2012）等により議論されている「時間構造」の概念を利用して英語の未来表現の特性と、それらを踏まえた教育現場での指導方法の例について考える。⁶ それぞれの先行研究が提案している時間構造には、表示方法や細かな用語の使用法、および提示される情報量等に幾分かの違いがあるが、基本的な分析手法は共通していると考えられる。具体的には、下記（8）のような時間構造図を用いて本節以降の議論を進める。なお、すでに述べたように、本稿の分析対象としては、英語の未来表現の中でも教育現場において中心的に指導される will 文と be going to 文を主に取り上げる。

大橋（2017）によれば、文によって表される出来事や状態を一括して「事態」と呼ぶと、時制とは、各文の表す事態が「現在」、「過去」、「未来」のいずれの時間領域に属するかを示す文法形式である。それぞれの事態が3つの時間領域に位置づけられる仕組みは、発話時（S: speech time）との相対的な位置関係に基づいて説明される。具体的には、事態の生起した時点、すなわち出来事時（E: event time）が現在なら発話時と同時、過去なら発話時より前、未来なら発話時より後に位置づけられる。金子（2002）の提案に基づけば、「現在」、「過去」、「未来」のそれぞれの時制が表す概念は、次のような時間構造図によって示すことができる。⁷

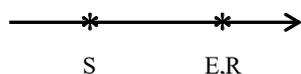
(8) a. 現在時制



b. 過去時制



c. 未来表現



上図において、矢印は時間軸を表しその先端方向が未来を示す。Sは個々の文を発話した時点、つまり、発話時を、Eは事態の生起時を示す。Sは基本的に現在時に位置する。Rは参照時

(reference time) を示し、E の位置づけの基準となる話者の視点が置かれる時点とされるが、少し理解しづらいかもしれない。上図に示すように、基本的には、発話された文の出来事時 E が含まれる時間領域と一致すると考えてよさそうである。⁸ なお、未来表現では will + 原形が用いられるが、原形動詞は時制を持たないので、現在形の will (cf. 過去形の would) が定形動詞の機能を果たすと考えられる (cf. 和田 (2012))。

このような分析に従えば、現在時制や過去時制などの各時制は単なる時間軸上の「現在」や「過去」といった概念として捉えられるのではなく、S、E および R の 3 つの要素の時間軸上の位置関係を総合して認識されるものということになる。本稿では、次節で述べるように、S、E、R の位置関係の違いを見ることで、will 文や be going to 文が表す未来の解釈や用法の違いが時間構造図の上で視覚的に理解できることを示す。

なお、このような新たな考え方を導入することは、中学校や高等学校での指導上は難しいという印象があるかもしれない。一方で、各時制を「～するつもりだ」や「(予定として)～するつもりだ」などの訳語の違いを中心に理解することにも困難を伴う学生もいるであろう。本稿では、will と be going to の区別を視覚的なイメージとして捉えることが、学生の理解をむしろ容易にすることに寄与することを期待している。

4. 未来表現の指導方法について

前節の時間構造を用いた時制分析に基づいて、本節では will + 動詞の原形および be going to によって表される英語の未来表現に焦点を当て、教育現場への応用という観点から、それぞれの解釈と用法の違いが生じる仕組みを、すでに言及した中学校および高等学校学習指導要領の方針に留意し、学生に対して過度な学習負荷をかけない範囲で効果的に指導する方法を探ってみたい。以下では、大橋 (2017) や和田 (2012) などの説明を援用して考察する。

4.1 will 文について

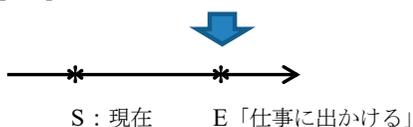
和田 (2012) は、will 文による未来表現に法助動詞の will と原形の動詞が用いられている点に注目し、will 以外に候補がないことから、will が主節の現在形の定形動詞であると分析している。ただし、will は過去形の would に対しても形式上は現在形であるが、この点を強調しすぎると、学生にとっては未来と現在の概念が交錯し、理解に混乱が生じる可能性があるため、この点の指導の仕方には注意が必要であると考えられる。すでに見たように、参照時 R は時間構造図では出来事時 E とともに未来に位置づけられる。

will は未来を表す語句の代表格として教育現場において指導に導入されるので、(9a) のような例が前節で導入した時間構造の点から、(9b) のように図示できることを指導することは、次節で議論するように、比較対象としての be going to 文を理解する上で有意義であろう。(9b) において、S は発話者が (9a) を発話した時 (= 現在) を、E は「彼が仕事に出かける」という出来事が起こる時点 (= 未来の一時点) を示し、参照時 R は E が発話時 (現在) から見た未来の出来事で

あることを示す参照点となっており、when 節（副詞節）が動詞句 E を修飾することで、「仕事に出かける」という出来事が生じる時点を「朝食の終了時」として特定化している。以上の点を (9b) の時間構造上で確認しながら指導することで、(9a) の文の意味を理解する過程を視覚的に指導することが可能になるだろう。（なお、本稿の目的は、教育現場への応用であるので時間構造などの表記には可能な限り専門的な表示方法を用いないこととする。）また、(9b) の時間構造は、以下で議論する be going to の時間構造と比較することで、学生にとっていっそう明快になると考える。

(9) a. He will go to work when he has had his breakfast.

b. [will] R : 「彼が朝食の終了時」



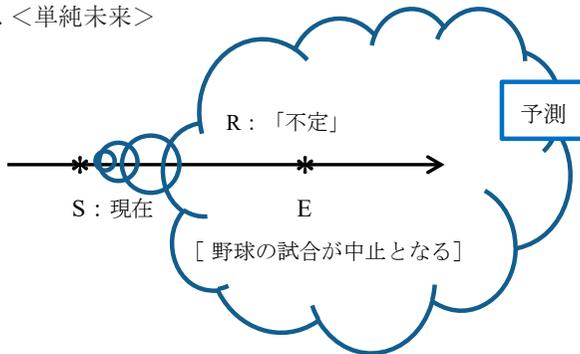
ここで、will の持つモダリティー（法）に関する特性について考えることにする。(9b) には will のモダリティーに関する情報は反映されていない。和田 (2012) がこの点に関する議論を行っているが、時間構造上への具体的な反映の方法については明確にしていない。次節で議論する be going to の用法との区別を明確にするために、ここで、will が「未来」を表すとされる根拠について、will の法助動詞としての特性の点からも確認しておくことにする。will は法助動詞の 1 つとして「蓋然性」(It is possible that …)、「予測 (的可能性)」(I suppose that …) の意味でも用いられる (浅川・鎌田 (1986))。例えば、(10) の例では、現在の天候状況に基づく試合開催の可能性に関する話者の予測が述べられている。

(10) “It is raining today I suppose the baseball game will be cancelled.” (ジーニアス英和大辞典)

これらの点を踏まえると、will が表す「未来」の意味は、「予測」を表す法助動詞としての用法にも起因すると考えられる。このため、浅川・鎌田 (1986) が指摘するように、純粋な時間に関する情報としての「未来」と未来に対する「予測」の意味とを明確に区別して用いることは難しく、will の表す「未来」の意味には「予測」や「蓋然性」に関する話者の何らかの判断が含まれることも多いと考えられる。本稿では、このような will のモダリティーに関する情報は次のように時間構造に反映されると提案する。

(11) a. I suppose the baseball game will be cancelled.

b. <単純未来>



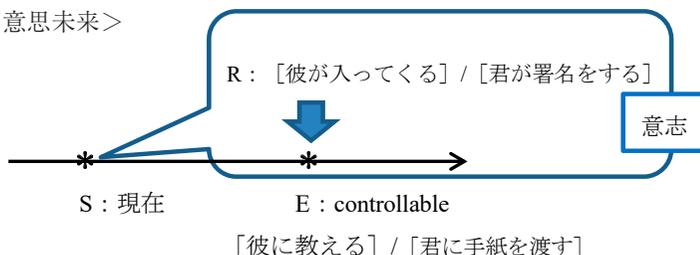
上図において、「吹き出し表記」は will が持つモダリティーの情報（この場合は「予測」）を表している。本稿では、このような表示をモダリティー・フレームと呼び、法助動詞の表すモダリティーに関わる情報を時間構造上に反映させる機能を持つと考えることにする。上図では、吹き出しの起点は発話時 S にあるが、これは、モダリティーは発話時点での話者の心理状態を表すからである。結果として、このことは、will が現在形の定形動詞であるとする和田（2012）の指摘とも関連している。なお、本例文中には具体的な参照時 R を表す副詞要素がないので、E は特定化されない。以上を総合すると、(11a) の解釈は、「天候状況（＝雨天）から、発話時点（現在）において、不特定の未来に（おそらく数時間後であると考えられるが）本日の野球の試合の中止が決定されることを話者が予測している」という解釈になる。つまり、これは、いわゆる will の「単純未来」の用法ということになる。

次に、「単純未来」と「意志未来」の区別についてであるが、すでに言及したように will には法助動詞としての機能があり、「予測」や「蓋然性」の外にも、「意志」(be willing to …/intend to …) および「主張」(insist upon …) の意味を持つため、(12) のような例では主語の「意志」（あるいは「主張」）の意を表すという解釈が自然となる。⁹ この場合、「彼に教える」や「君に手紙を渡す」などの動詞の表す出来事を主語がコントロールできる (controllable: C) という点が重要である (和田 (2012))。教育現場において、いわゆる「意思未来」として指導される will の用法が生じるのはこのような場合であると考えられる。これに対して、前例が示す状況に含まれる「野球の試合が中止となる」という出来事は、主語によりコントロールすることは不可能である。従って、(11) の場合の will はいわゆる「単純未来」の用法として区別されることになる。

(12) a. I will tell him as soon as he comes in. (リーダーズ英和辞典)

b. When you have signed it, I will hand you the letter. (新英和大辞典)

c. <意思未来>



(12a, b) の例を本稿が提案している時間構造を用いて示すと、(12c) のようになる。ここでも、Sは現在に位置づけられ、Eは「彼に教える」や「君に手紙を渡す」という出来事が生起する未来の一時点を示し、前例とは異なり when や as soon as によって導かれる副詞節（「彼が入ってきたらすぐに」や「君が署名をしたら」）がRとして機能し、時間軸上でのEの位置は特定化される。また、ここでの will のモダリティーに関する情報は「意志」であるので、前例の場合と区別して別のフレーム形状を用いて視覚的に示すことが、現場での指導の際には有効であると考えられる。

このように、will の持つ「単純未来」と「意志未来」の2つの用法は、いずれも (11) や (12) に示すように、基本的に同じ時間構造で表すことができ、それぞれの解釈の違いは、法助動詞としての will が持つ特性の違い「予測」・「蓋然性」と「意志」・「主張」から生じると考えられる。この点に基づき、実際の指導現場では、will の持つ時間・時制に関するイメージを時間構造をもとに指導し、「単純未来」と「意思未来」の区別に対しては、will が法助動詞であることと関わっており、2つの用法の違いが時間構造の上ではモダリティー・フレームの違いとして視覚的に示すことができる点を指導することが有効であると考えられる。なお、このような指導方法は、can、may、must などの「推量」の意味を持つ助動詞グループに関する体系的な指導案に発展する可能性があると考えられる。¹⁰

4.2. be going to 文について

次に、未来を表す表現として will とともに教育現場で主に取り上げられる be going to 文の指導方法について検討してみたい。この表現の指導においては、すでに示した学習参考書などの記載例を見ると、否定文や疑問文といった形式上の指導のほか、訳語の違いで will と区別することが指導の中心になっている可能性がある。その場合、will と be going to の区別は「～するつもりだ」や「(予定として) ～するつもりだ」などで行うことになるが、このような区別は明瞭ではなく学生の理解を混乱させる可能性があり、結果的にコミュニケーションの場面において効果的な使い分けができないという事態につながるのではないだろうか。

(13) a. The parcel will arrive tomorrow. (= (1c))

b. The parcel is going to arrive tomorrow. (Leech (1971: 51))

前節の will の場合とは対照的に、be going to は法助動詞ではなく文法形式の点からは現在進行形

の一種であると考えられるので、本節では be going to のアスペクト（相）特性に注目して、いかにして未来の解釈が生じるのかという点を議論する。また、そこで得られた知見を教育現場にどのように応用できるかについて議論する。

進行相の特性は、ある特定の時点での「進行中の動作」を示すことであるが、その中核的な意味は「一時性」と「未完了性」である（柏野（1999））。言い換えると、進行形の意味は「一時的事態の継続」であり、事態の継続部分に焦点を当てる文法形式である（大橋（2017））。また、be going to の原義には移動の意味が含まれていたが、現在では「行く」の意味が失われ、「事象の進展」を表す意味に転化したため be going to go や be going to come などの表現も可能である（cf. 柏野（1999 : 56）、『ジーニアス英和大辞典』など）。以下では、これらの be going to の特性が本稿が提案する時間構造にどのように反映できるかという点を考察する。

まず、単純進行形の時間構造を確認しておく、John is singing a song のような現在進行形の文は (14) の構造で表される（cf. 金子（2002））。発話時 S は他の場合と同様に現在であり、定形の be 動詞が現在形であることから、出来事時 E と参照時 R は現在である。図中の波ダッシュ記号（「～」）は事態が進行中であることを示し、角括弧に囲まれた事態の生起時（ $[E \quad]$ ）はその事態に「始まり」と「終わり」がある（つまり、境界的である）ことを示すものとする。従って、(14b) では「歌う」という事態が一時的に継続されており、この継続期間には時系列上その内部に R と S が含まれている点に注意したい。つまり、進行形が表す事態は発話時の前から始まり発話の後も継続されることとなる。本稿では、これが単純進行形の時間構造であると考えられる。

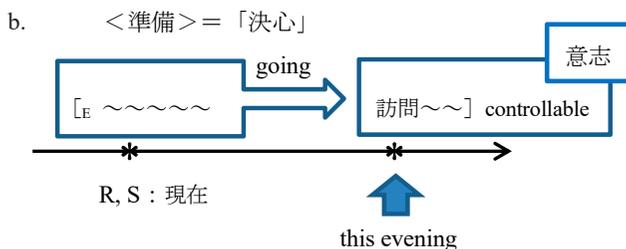
(14) a. John is singing a song.

b. 【現在進行形】



上記の時間構造に基づいて、be going to の時間構造を考えてみると、(15a) に対する時間構造は (15b) により示される。(14) の場合と同様に、S と R は現在であり、「訪問」という事態が「現在」時点を含めて進行中である（cf. $[E \quad]$ ～～ 訪問する～～）。ただし、ここでの事態は going の特性による影響を受ける。移動の意味を失った be going to の going は「事態の進展」を表すことにすでに言及したが、本稿では going の持つこのアスペクト特性は、時間軸に沿って継続中の「訪問する」という事態を未来に向けて進展させると考え、この仕組みにより be going to の意味が未来表現に拡張されると考える。この点を時間構造に反映させるために、前節で will の特性について使用した「推量」や「意志」のフレームとは別のイメージを利用することが、学習指導において有効であろう。本稿では、(15b) に示すように「矢印付き長方形」と「長方形」を組み合わせたイメージを使用する。

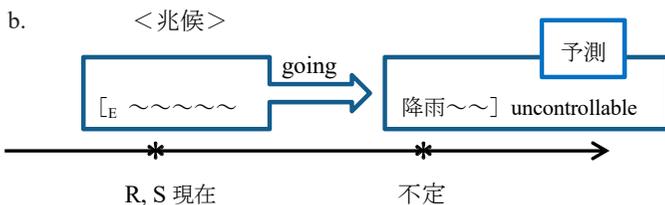
(15) a. I'm going to visit her this evening. (Murphy (2012))



これにより、上例では、「訪問する」という事態が副詞句 *this evening* により特定化される未来の時点まで時間軸上を進展する。ただし、(15a) の解釈では、実際に訪問が実行されるのは今晚であるため、そこに至るまでの間の事態の継続は、訪問を行うための何らかの「準備」が継続されていると指導するのが、学生にとっては理解しやすいであろう。紙面の都合で本稿では具体的には議論しないが、*I'm visiting her this evening* などの現在進行形を未来表現として用いる場合は、*be going to* よりも蓋然性が高い未来を表すとされ、発話時点で何らかの「約束」や「具体的な準備」が進行中であることを含意すると説明されている。この点と比較すると、*be going to* の場合は、蓋然性の比較の点から「心的準備（決心）」などの「準備」が行われていると考えるのが妥当だと考える。

また、「訪問する」という事態は、主語によるコントロールが可能であるので、(15a) の解釈は *will* の「意思未来」に相当し、「(決心しており予定として) ~するつもりだ」となる。一方、(16a) の「雨が降る」など、主語のコントロールが及ばない事態の場合も、同じ時間構造で表すことができるが、その場合の解釈は *will* の「単純未来」に相当し、意図性の入らない「(この分だと) ~しそうだ」という「予測」の解釈に当たると考えられる。実際に雨が降り出すまでの事態の継続過程では、例えば、風や雲の状況など、「雨の兆候」が進行していることを表すと指導できるだろう。

(16) a. Look at the sky! It's going to rain.



5. まとめ

以上の議論により、本稿では、英語の代表的な未来表現である *will* と *be going to* を教育現場で指導する際に効果的であると考えられる指導方法について検討した。*will* と *be going to* はともに英語の未来表現の中でも代表的なものであり、教育現場における指導が「~だろう」、「~するつも

りだ]、「～する予定だ」や「(予定として)～するつもりだ」などの訳語の違いに基づくものであるとすると、学生にとっては曖昧で不明瞭な印象を与えられとされる。本稿では、発話時 S、出来事時 E、と参照時 R という時間要素を導入し、時間構造との関係を用いることで両者の違いを視覚的に捉えることが可能となることを示した。さらに、will と be going to の解釈と用法（使い分け）の違いは、未来を表す仕組みがモダリティー特性とアスペクト特性のいずれに起因するかも関わっていることを示した。また、その点に関する指導案として、時間構造図において視覚的なイメージを利用して学習させる方法を示した。

一方で、本稿の主旨は、未来表現に関する指導を単に簡単・簡潔にすることではなく、なぜそのような解釈の違いが生じるのか等について、その仕組みを理解することの重要性を示すことにある。従って、説明の過程では、モダリティー（法）やアスペクト（相）など、やや複雑な概念を導入する必要がある。そのような部分については、教える側と学ぶ側の負担をできる限り軽減する目的で、「吹き出し表記」などを用いて視覚的な理解を促す方法を利用した。しかしながら、教育現場での限られた指導時間の中でどの程度このような指導方法を取り入れることが可能かについては、さらなる議論と改善の余地があるであろう。この点に関しては今後の課題としたい。

注

* 本稿の内容の一部は、2018 年 11 月 10 日に行われた宮城学院女子大学人文社会科学研究所 2018 年度公開シンポジウムにおいて発表した。その際、参加者の皆様から貴重な質問やコメントを頂いた。この紙面を借りて感謝申し上げます。

1. (1a) は現在時制を用いた確定的な未来を表す表現である。紙面の都合上、本稿では必要のない限りこの用法についての言及はしない。
2. 昨今の中学校・高等学校の指導方法にはアクティブ・ラーニングを取り入れることが推奨されているが、個々の表現の特性を理解せずに単に表面的な手法としてアクティブ・ラーニングを用いたとしても依然として正確な理解には繋がらないであろう。
3. 一方、「古典 B」の文法事項の指導については、「文語文法の指導は読むことの学習に即して行い、必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする」（「高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月）」 p.17）と記されている。
4. 時制等に関して、平成 21 年度版の高等学校学習指導要領解説では「[時制など]とは、時制 (tense) と相 (aspect) の組み合わせを指している。ここでの時制は現在時制と過去時制を指し、未来の表現は助動詞等を用いて表すと考える。相には、進行相と完了相があり、この組み合わせのうち、中学校で指導するものは、現在形、過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形、助動詞などを用いた未来表現である。高等学校では、残された「時制など」のうち、新たに、現在完了進行形、過去完了形などを加えて指導する。」(p.42) と記されている。
5. 柏野は、1994 年版（第 2 版）を用いているが、本稿では、同じ例が用いられている 2012 年版（第 4 版）を用いている。
6. 時制に関する同様の分析については、Reichenbach (1947) も参照のこと。なお、「時間構造」という用語は、和田 (2012) によるものである。
7. 「時間構造図」に関する初期の提案については、Reichenbach (1947) 等を参照のこと。

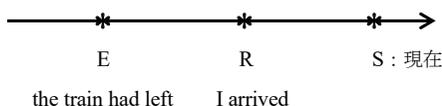
8. Reichenbach (1947) は、英語の各時制についての構造図を示しているが、参照時 R が時間軸上のどこに位置づけられるかとまとめると以下のとおりであり、S との相対的な位置関係で考えると、R は概略、E の時間領域に含まれると考えられる。

時制	R の位置	時制	R の位置
現在	現在	現在完了	現在
過去	過去	過去完了	過去
未来	現在	未来完了	未来
現在進行形	現在	現在完了進行形	現在
過去進行形	過去	過去完了進行形	過去
未来進行形	現在	未来完了進行形	未来

R の働きが目目されるのは、現在や過去などの基本時制よりは、過去完了などの複合時制の場合である。(ia) の過去完了の文の解釈は、S (現在) と E の間に E よりは現在に近い R (参照時) を設定することで理解される。

(i) a. [_E The train had already left] [_R when I arrived at the station]. (大橋 (2017))

b.



9. 大橋 (2017) が指摘しているように、will の語源は「欲する (willian)」という意味の本動詞であるので、現代英語の will が持つ「意志」や「主張」の意味はこの will の原義に由来すると考えられる。(cf. will の原義については、田辺 (2017) 等も参照のこと。)

10. can, may や must も「蓋然性」や「予測」という認識状態の解釈を持つので、will と同様に未来表現の一種と考える分析もある。

参考文献

- 浅川照夫・鎌田精三郎 (1986) 『助動詞』, 大修館書店, 東京.
- 柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』, 開拓社, 東京.
- Murphy, Raymond (2011) 『マーフィーのケンブリッジ英文法(初級編)』, Cambridge University Press, Cambridge.
- Murphy, R (2012) *English Grammar in Use* (4th ed.), Cambridge University Press, Cambridge.
- 大橋一人 (2017) 「相と時制」『授業力アップのための一歩進んだ英文法』加賀信広・大橋一人(編), 62-84, 開拓社, 東京.
- 金子義明 (2002) 「時と時制」『英語の主要構文』中村捷・金子義明(編), 11-20, 研究社, 東京.
- Leech, Geoffrey (1971) *Meaning and the English Verb*, Longman, London.
- Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*, Macmillan, New York.
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage* (2nd ed.), Oxford University Press, London.
- 田辺春美 (2017) 「英語史は役に立つか?—英語教育における英語史の貢献—」『成蹊英語英文学研究』第 21 号, 95-113, 成蹊大学.
- 和田尚明 (2012) 「英語の「未来」の文法」『最新言語理論を英語教育に活用する』藤田耕司・松本マスマ・児玉一宏・谷口一美(編), 300-310, 開拓社, 東京.

<辞書・学習参考書など>

『新英和大辞典』第六版, 研究社, 東京.

『リーダーズ英和辞典』第三版, 研究社, 東京.

『きちんとこれだけ公立高校入試対策問題集 英語』旺文社, 東京.

A Study on How to Teach English Future Expressions

—With a Focus on *will* and *be going to*—

MASUTOMI Kazuhiro

The purpose of this paper is to seek for effective ways of teaching English future expressions such as *will* and *be going to* in junior high schools and high schools in Japan. There has been much discussion about how to teach the English future expressions effectively, mainly in the fields of English linguistics, TESOL, SAL (second language acquisition) and so on. It has been pointed out that in junior high schools and high schools much attention is focused on teaching the formal points of the future expressions. Also, it is often said that the students have difficulty in using the expressions effectively in communicating in English. However, it seems difficult to impart to the students how to use such expressions appropriately depending on the situation, because the study time in their schools is very limited.

With such a situation in mind, this paper discusses the ways of teaching the usages and meanings of *will* and *be going to* considering the relation between their “tense,” “aspect,” and “mood.”